

私が育てたカラス
の
赤ちゃんの話Ⅷ



さようなら、カーちゃん

石下郁子

さようなら、カーちゃん目次

さようなら、カーちゃん（1）・・・・・・・・・・2ページ

さようなら、カーちゃん（2）・・・・・・・・・・3ページ

オナガはうすい水色がかった美しい羽をもつ鳥です。

カラスよりはるかに小さく、その名の通り尾が長く体型もすんなりとした美しい鳥です。

いつか郊外を車で走ったとき、おびただしい数のその鳥が、田、1枚を隔てて走る畔道沿いの木々の中に止まっているのを見ました。

木という木に鈴なりにいるその鳥を不気味に感じたものでしたが、木々がきれいに葉を落としていたことから、あれは冬のことだったと思いかえしています。

その時はそれがオナガだとは知りませんでした、カーちゃんを保護したばかりのころ、カラスの天敵を調べていてその名と生態を知りました。

オナガの集団がカラスの巣を襲い、ヒナを狙っている様子が動画で流されていたのです。

執拗な攻撃に、カラスの親はとうとうヒナを守りきれなかったという悲惨な結末でした。

ただオナガがカーちゃんの仲間を襲った頃はまだ、周辺にそれほど頻繁にオナガを見かけていたわけではありません。

もっともそう度々外の様子をうかがっていたわけではないので、気付かずにいたのかもしれませんが。確かな変化は、以前あれほど見かけ、声も聞いていたカラスが、周辺から姿を消してしまったことです。

見かけるのはわずか数羽のカラスだけ、それは間違いなくカーちゃんの家族なのでした。

オナガの襲撃後、カーちゃんが私の前に姿を見せる時は決して単独では来ず、背後に必ず別のカラスがいて、カーちゃんをせかすようにしていました。そしてカーちゃんは明らかにそれを気にしています。

9月5日（月）、は午前中野菜の収穫のために畑に行きました。

昼近く雨が降り出したので、住宅地の中を横切って帰宅するとき、カーちゃんがもう1羽のカラスと屋根の上において、先に私を見つけたらしく自転車の荷台に乗ってきました。

いつも食べ物を持ち歩いていたので、パンを上げると少し食べてからそれをくわえてまた屋根の上に上りました。すると仲間が来てそのパンを奪ってしまいました。

初めて見る光景です。今までいっしょにいた見張りガラスとは別のカラスか、それとも雨が降っていて餌をとれないと思ったためなのか。

カーちゃんをあわてて飛びのき、別の屋根に移りこちらを見ています。降りしきる雨。残念だったのはその時持っていたのがパンだけだったこと。その辺に置けば雨に溶けてしまいますし、周辺も汚します。

屋根の上と下において何とか残りのパンを上げたいと思いましたが、住宅地の中で人目もあり、カーちゃんが下りて来ないのでとうとうあげることができませんでした。

夕方、雨がやみ友人の家に行く用事があったため、電器店の前を通ると、カーちゃんが電器店とビデオショップの間の電線に止まって鳴いていました。

お菓子を作ってそれを持って行くところで、念のためカーちゃんの分も持っていたので、何とかあげたかったのですが、この時もやはり上げることができませんでした。ただ声を張り上げて鳴くばかり。

急いで用事を済ませて同じところを通りました。

カーちゃんはまだ同じところにいて同じ調子で鳴いていましたが、やはり下には来ませんでした。

9月6日（火）

あやしい雲行き、暗い。

カーちゃんは昨日と同じ電線に止まって鳴いていました。

私を認識できないのかただ鳴いているだけ。

周りにはやはり数羽のカラス。

カーちゃんたちを早く巣に帰さなければと思ったのでそばを離れました。

9月7日（水）

カーちゃんはいつもの電線に止まって鳴いていました。

早い時間だったので公園の中に入り、そこから見える南側に自転車を回しましたが、気が付かない様子なのでいつもの道から回ると、この時は電線伝いについて来ました。

しかしやはり下には下りてこず、公園内の電線に止まって鳴いています。

昨日やれなかったお菓子をあげようと思い、見える場所に置いてみましたが、ただ鳴いているだけで下りて来ません。

やがて仲間の方に飛んで行ってしまいました。

9月8日（木）

早い時間、信号のところに行ってみました。

いつもの電線のところ姿が見えないので、公園の方に向かったら、突然頭上で声がしてカーちゃんがすぐそばの電線に止まって鳴いていました。

通りを一つ中に入ると後を付いてきました。すぐの丁字路の東は公園の入り口ですが、人がたくさんいたので別の公園に誘導しようと思いました。少し行ったところで自転車を止め待っていましたが、カーちゃんは公園の前の電柱に止まってそこから動こうとしません。

私もカーちゃんもしばらくそのままの状態でお互いを見ていました。

絶え間ない人通り、そこにカーちゃんを呼んでいるらしい仲間の声。

カーちゃんはとうとう仲間のいるビデオショップの方に飛んで行ってしまいました。

ふと、これが最後になるのではないか、という気がしました。明日は15時からしか受診できない病院皮膚科の、予約が入っていたのです。

病院から帰ってから念のためと思い、いつもの場所に行ってみました。

カーちゃんはやはり来ていませんでした。

翌日もその翌日も、カーちゃんもその仲間もいつものところにきませんでした。

周辺のあちこちで、頻繁にオナガを見かけるようになったのは、カーちゃんたちが姿を消して間もなくのことでした。

「この頃、カラスいなくなりましたね」

お向かいの奥さんにそう声をかけられたのは、秋も大分深まったころだったと思います。

このころになると他の人が気付くほど、カラスというカラスが姿を消していました。

木々の茂った公園にでも行ってみれば少しは目にできたかもしれません。

ただ日中カラスがどこかから飛んできて、電線に止まっていたり、朝に夕に鳴きながら空を横切っていくという光景は見られなくなっていました。電器店の屋上に集まるカラスはもう一羽もいません。

カーちゃんがいなくなった寂しさを感じつつも、一方で私はある安堵も感じていました。周辺でおびただしい数のオナガを見かけるようになったからです。

オナガは植栽された街路樹に群れをなしていたり、公園や畑の、以前カーちゃんが止まって鳴いていたあたりに3羽、5羽と並んで止まっていたりします。

カーちゃんがいなくなった直後、玄関わきの駐車場に小鳥の羽と、その鳥の骨らしいものを見つけてはっとさせられたことがありました。

かわいそうに、羽の模様から孵ったばかりの鳩のヒナの羽と骨だということが分かりました。

こんな場所にあるところを見ると、鳩のヒナはきっと猫に襲われたのだと思い一瞬心が凍りました。

カーちゃんも一歩間違えばこのような運命にあった、とこのとき思いました。自然界で淘汰されていく生き物の命。それは仕方がない事なのだと誰もが思っています。

でもそんな厳しさの中で、カーちゃんは仲間から身を守るすべを教えられ、これから何年かは生きていってくれるだろう。それを信じたいと思いました。

カーちゃんが姿を消してからひと月ちょっと過ぎたころ、身内に不幸があって早朝車を乗りだしたことがあります。

その時、我が家の駐車場がよく見える場所の民家のテレビアンテナの上に、2羽の親ガラスがいるのを見ました。親ガラスはカーちゃんを見失って捜しに来たのか、と不安になりました。

カーちゃんの親きょうだいは、以前もそんなふうにしてカーちゃんを捜しに来ていましたから。

すっかり放浪癖のついたカーちゃんは、相変わらず気ままにあちこち飛び回っているのかも知れないと思いました。

11月になって冬の訪れを意識した頃、近づく寒さにカーちゃんの身を案じていたためか夢を見ました。

すっかり枯れ木になった山の中で、やっぱり枯れ木のように羽が抜け落ちたカーちゃんが私を訪ねてきた夢でした。

喜びながらもあまりの姿を痛ましく思っていると、カーちゃんは元気で仲間を紹介しました。

でもそれは、カーちゃんと同じ種類のハシボソではなく、ハシブトガラスなのでした。

種類が違って友達になれるの？と思ったところで目が覚めました。

そのときカーちゃんが男の子だったのか、女の子だったのかついに分からなかったと思いました。

それからカーちゃんが真っ赤な口を開けて餌をねだっていた様子や、家の周りや畑や公園で、私に向かって翼を水平に広げて飛んで来た時の様子を、写真に撮れなかったことを残念に思いました。

その姿にただただ感動し、シャッターチャンスを逃してしまったのでした。

カラスは周辺に姿を見せない期間がずいぶん長いこと続きましたが、冬になるころ、ときどきは見かけるようになりました。でもそのなかにカーちゃんはいませんでした。

その後、カーちゃんらしいカラスを見かけたのは、翌年の3月になってからです。

その次は5月。この時のことはカラスの赤ちゃんの最初の記事に書きました。

それからはその姿をときどき見かけます。私が洗濯物を2階のベランダに干していたりすると、そこから見える電器店の屋上にその姿があつたりします。

いつまでもそこにいて動かず、それでいて私がほんの一瞬部屋の中に入り、再びそこに戻ったときもうどこかに行ってしまった、というようなことが何度かありました。

きっとカーちゃんだと思うそのカラスはたいていは1羽でいますが、最近もう1羽のカラスと、悠々と畑を歩いていたことがあります。

何もなかったので持って行った生ごみの中から、まだ新しいリンゴの皮と煮干しを取り出して、目立つところに置きそばを離れると、2羽のカラスはそれを食べていました。

カーちゃんはもう私のことを覚えていません。3日目に親も、自分がカラスであることも忘れてしまうほど小さかったカーちゃんでしたから。

32日間我が家において、22日は畑で人間から餌をもらい、どうやら仲間と交流が持てて公園に来ていたのが28日間でした。数えてみると本当に短い期間でした。

成長し、日ごとに変わっていく様子を胸のつぶれるような思いで見ていることもありましたが、大自然の中で生きるすべは、種族として持ち合わせた本能と、危険に向かい合いながら、仲間から培われていったものです。巣立ち時のつまずきは、何らかの影響を残してしまいましたが.....

カラスの寿命は順調にいけば10年とも20年とも言われています。

思ったよりもはるかに長いこの寿命をできれば全うし、大空を飛ばたいってほしい。

やがて私は「私が育てたカラスの赤ちゃん」の姿を見失ってしまうでしょう。

私のこのブログ記事を応援して下さっている彼岸花さんという方のブログに、最近こんなコメントを書きました。

私はカーちゃんが、白鳥やトキ、みたいな特別な鳥でなくてよかったって思っているんです。たとえカーちゃんでもカラスはそこらじゅうにいるから、見るたび「ときめき」を感じ

じさせてくれるからです。私 は世の中のカラスというカラスの応援団長になりたい。

カーちゃんを保護したちょうど1年後の去年6月22日の午後、市内を車で走っていた時、車や人通りの多い中でしたが、巢立ち間もないと思われるカラスが親ガラスと一緒に電柱にとまっているのを見ました。

何かを教えられているその様子に（ああ、今そんな季節）と1年前、カラス親子の絆の深さに感動した時のことを思い出しました。

またひと月ほど前、近隣の親戚の家に向かったとき、大きなカラスが巣作りのためか、長い木の枝を口にくわえて飛んでいるのを見ました。

自然界に生きる生物は様々な工夫をし、命の営みを続けているということにこんなにも深い感動を覚えるのは、カーちゃんという一羽のカラスとの出会いによってだという気がします。

昔、私の子どもが録音していたテープに確か『ジュリア』という曲があって、その中にこんな言葉がうたわれていました。

とても切ない別れの歌なんです

『ありがとう、やさしさを、ときめきを、涙を』って.....

今、私も、そんな気持です。「カーちゃん、ありがとう」って。

その後のこと

今も電器店の屋上に、近くの電柱に1羽だけにいる姿を見かけます。

きちんと折りたたみず、広がったままの翼。体がかゆいのか、羽づくろいのためせわしく動かしている体。

カーちゃん、あなたは本当にあのカーちゃんなの??、
と思いながらそれを見上げ、

もう、2歳になるんだね、おともだちはどうしたの？ お父さんお母さんはどうしたの？ と心配してしまいます。

この冬の寒さも、雨風の強い日もどこかでそれをしのいできたたくましさ。
どうしているかと、いつも心にかかったものでしたが.....

終

II カラスのきょうだいたちがやってきた

III 畑で暮らすカーちゃん

IV 畑で暮らすカーちゃん (2)

V 公園のカーちゃん

VI 『夕焼、小焼の あかとんぼ』

VII オナガの襲撃

VIII さようならカーちゃん

私が育てたカラスの赤ちゃんの話VIII

<http://p.booklog.jp/book/76182>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76182>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76182>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ